

特集：レジャー・レクリエーション研究における基本書

活動・行動研究分野から

高橋 和敏\*

An Overview of Activity and Behavior Studies  
in Leisure and Recreation

Kazutoshi TAKAHASHI

I はじめに

与えられた課題は、レジャー・レクリエーション活動や行動研究分野の研究動向、そしてそれらの研究に関わる基本書を紹介することである。

まず初めに、幾つかの点をおことわりしておきたい。そのひとつは、レジャー・レクリエーション研究ということである。「レジャー・レクリエーション研究とは？」と問われ、あれこれ考えだすと切りがなくなる。しかし、ここでは「レジャーやレクリエーションの発展に寄与する研究」と考えることにした。その前提には、レジャーやレクリエーションが、人類の幸福にたいへん重要な役割をもっていると思うからにはかならない。

第二の点は、「研究」である。ひとくちに研究といっても、「よく研究したまえ」と、会社の上司に軽く言われることから、「その研究方法は・・・」など、学術的な研究に至るまで、その捉えかたはさまざまである。ここでは研究を、ごく単純に「ある物事を、客観的によく調べ、真理を探る」という素朴な原点に立って、話を進めることにした。

次に気にかかったことは、「活動」と「行動」の違いについてである。ふだん何気なく使用しているこれらの言葉も、厳密に区別しようと思えば、なかなか骨が折れるものである。ここでは、活動 (activity) を「人間が何かをする場合の対象や状態」というイメー

ジで考えることにした。そして、行動 (behavior) は「人間や動物が何かをしようとして、心身を動かす (反応すること) と解釈することにした。したがって、これらの言葉は、表裏一体の関係、あるいは主体と客体関係にあるものと理解できる。そのようなわけで、「活動」と「行動」を、必ずしも正確に使い分けしない場合があることを了承していただきたいと思う。

II 活動・行動研究がベースとなる

まず、レジャー・レクリエーション分野における活動・行動研究の領域を、垣間見ることにしたい。

広く考えてみると、およそ人間がいるところ、必ず活動や行動ありと考えられる。

ある活動に着目し、その活動がレジャー・レクリエーション活動となり得るかを研究するとすれば、その研究は活動の類型化や活動そのものの分析・評価あるいは開発ということになる。いわば活動研究の範疇であろう。

一方活動の主体 (個人的にも集団的にみても) に焦点を当てると、活動に関わる人間がどのような行動をとり、いかなる状況にあるかを、克明に調べることとなってくる。行動研究ということになろう。

また人間は複雑な環境の中での存在である。それを、どのような視点 (心理現象としてみるか、社会・経済現象あるいは環境からなど) からアプローチするか、

あるいはまた、集団状況における相互作用やリーダーシップの問題としてとらえるかなど、レジャー・レクリエーションの活動・行動研究も多岐に亘っている。

さらに、対象となる場（野外・地域・職域など）や状況（年齢・性別・障害・人種など）を考えると、その研究範囲も限りなく広がりをもってくる。

こう考えてくると、活動・行動研究は、多かれ少なかれレジャー・レクリエーション研究すべての領域に関わりがあるものといえる。その基礎といっても差し支えがなからう。

このようにレジャー・レクリエーション活動・行動研究は、現実には生起する現象をとらえることから始まるものといえよう。したがってその方法は帰納的なアプローチをとることとなる。すなわち人間をとりまくさまざまな活動や行動現象を解明し、それらを積み重ねたり、統合しながら、レジャーあるいはレクリエーションの本質を見極めようとするわけである。

ただしその研究が、前に述べたようにレジャー・レクリエーションの観点に立っているか、それともレジャー・レクリエーション活動や行動を利用して、他の目的を追求しているかの判別はなかなか難しい。

また、研究が現実には直ぐ役立つものか、長期的な基礎研究であるかによっても、その判断がつきにくいことが多い。はっきりしていることは、その研究の最終的に目指すところ（使命といってもよい）が、どこにあるかということで決定されるべきものと思う。

### III 活動・行動研究の動き

次に、最近における活動・行動研究の流れに、目を向けてみようと思う。その全体像を網羅することはとてもできない。関心の向くままに挙げてみよう。

「余暇時間の増大に伴い・・・」云々とは、レジャー・レクリエーション関係図書ばかりでなく、現代事情を語る図書にもよく書かれている。ところでその論拠となっているのは、ほとんどが5年毎に実施されているNHKの生活時間調査である。それによってレジャーに対するわれわれのイメージもできあがってきたようなものである。これもレジャー・レクリエーション活動・行動研究の成果といえよう。

しかしながら、レジャーを単に時間や活動として客観的にとらえられるものであるかという疑問にぶつか

る。レジャーは、個々人の経験であり、主観的な状況によるものではないかという主張に従えば、活動パターンを設定しての量的調査では、的確にレジャーを把握することはできなくなる。

このような観点から、最近（最近といっても1970年代半ばから）では「経験標本抽出法」が開発され、その研究が推進されている。日本においても、西野他や佐橋（1996）らが行き組み始めた。その成果によっては、従来のレジャーのイメージを、本質的に改変する可能性も秘めているといえよう。

以上のような、いわば基本的なもののほかに、主に心理学、社会心理学、社会学からのアプローチによるレジャー・レクリエーション活動への参加動機、参加経験、満足感、ライフコースでの位置付けなど、レジャー・レクリエーション関係の現場を見据えた研究もたいへん活発に行われるようになってきた。

さらに「レジャー活動が果たしてよいものかどうか」という疑問から、レジャー活動での不満、退屈感や倦怠感を見極めようとする、研究の深化傾向も多くみられるようになった。

また、レジャー活動が個人の健康に及ぼす影響あるいは効果に関する研究も多い。個人の性格にフィットするレジャー活動を探る研究（S.Melamed & E.I. Meir, 1995）やレジャー活動での友人関係と精神的健康との関わりを捉えようとする研究（Sepo E. Iso-Ahola & Chun J. Park, 1996）などが、最近の雑誌にみられた。

さらに最近では、現代社会でのさまざまな社会問題との関わりでレジャー・レクリエーション行動を捉える研究も増加している。もともとアメリカでのレクリエーション運動の発端は、青少年の非行防止という具体的な問題であった。社会問題を直視した実践的研究を考えるならば、当然の趨勢であろう。

麻薬とレジャー行動との関係、エイズとレクリエーション、ホームレスや失業問題とレジャー、非行青少年とレジャー・レクリエーション活動、ジェンダー問題、人種とレジャー・レクリエーション、高齢者とレジャー活動など、日本では数少ない研究も、北米やヨーロッパでは、果敢（？）に取り組んでいる。

この項の終りに、蛇足ながら観光（tourism）問題に触れておきたい。日本では観光とレジャー・レクリエーションが、学会も協会も別組織となっている。そ

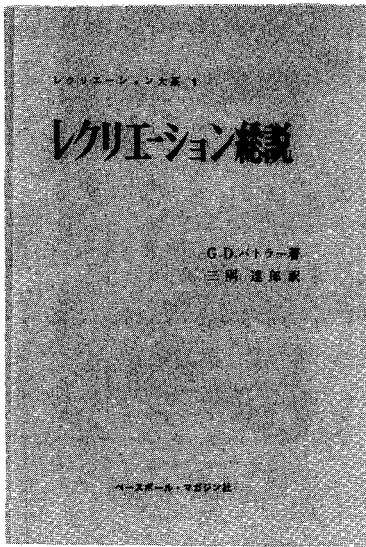


写真1. レクリエーション総説



写真2. レクリエーション学の方法

のためかどうか、本学会でも、観光に関する研究は数少ない。しかし国外では、同じ領域として最近とみに増加の傾向にある。日本においてもそうでありたい。

#### IV 活動・行動研究の基本書

さて、本題の活動・行動分野からみたレジャー・レクリエーション研究の基本書の紹介に移ろう。基本書の選定となると、あれこれ迷ってしまうが、一応下記に挙げるものを参考にさせていただきたい。

★G. D. バトラー著・三隅達郎訳「レクリエーション総説」ベースボール・マガジン社・1962

本書は、George D. Butlerの「Introduction to Community Recreation」の訳本である。原書は、現在アメリカにおけるレクリエーション行政組織確立の基礎を築いたパイオニアとあってよからう。また訳者の三隅達郎は、戦前の厚生運動、戦後のレクリエーション運動の推進者のひとりとして活躍された。本学会の副会長や日本レクリエーション協会理事、日本キャンプ協会会長などの要職にあつて、かねてからレクリエーション運動の実践と研究の融合を主張されてきた。

内容は地域レクリエーションに関して、その全般に亘っての理解を深めるように記述されている。したがって、現在の研究に直接関わらないかもしれない。しかしその基礎としての知識を得るには最適であろう。古

典的文献のひとつとして価値あるものである。

★日本レクリエーション学会編「レクリエーション学の方法」ぎょうせい・1987

いうまでもなく本書は、本学会員の協力による力作である。全体を6分野（歴史と原論、意識と行動、活動とプログラム、サービスと管理運営、資源と空間、政策と運動）に分け、それぞれについて主に研究方法を中心に、その視点、動向などを詳述している。とくに活動・行動研究の分野については、第2章と第3章を参照していただきたい。

また、レジャー・レクリエーション研究に関しては、Thomas L. Burton編著「Recreation Research & Planning」1970と「Experiments in Recreation Research」George Allen & Unwin・London・1971の地域研究シリーズや日本レクリエーション協会編・レクリエーション体系Ⅲ「レクリエーションの科学」不昧堂出版・1975も参考になる。

★Sepo E. Iso-Ahola 著「The Social Psychology of Leisure and Recreation」Wm. C. Brown Co.・1980

本書は、社会心理学からのアプローチでレジャー・レクリエーション行動を解説したテキストである。レジャー・レクリエーションにおける社会心理学の役割、その研究方法、野外レクリエーションやセラピューティック・レクリエーションに対する社会心理学からの見方などが記述されている。なお著者は、アメリカにおけ

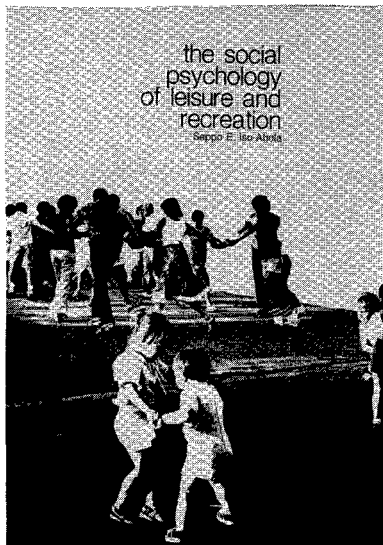


写真3. The social Psychology of Leisure and Recreation

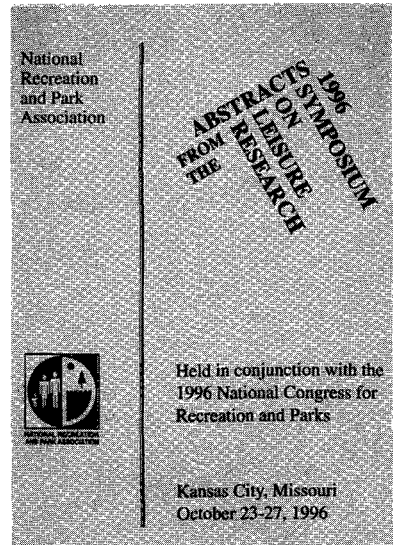


写真4. Abstracts from the Symposium on Leisure Research

るレジャー行動研究の中堅として活躍している。

★NRPA編「Abstracts from the Symposium on Leisure Research」NRPA・毎年1回発刊

本書は、全米レクリエーション・公園協会の年次会議と並行して行われるレジャー研究シンポジウムの研究発表の抄録集である。単行本ではないが、毎年発刊されている。活動・行動研究のみならず、北米における各分野の研究動向を知るのには、最適といえよう。興味ある発表については、個人的にも問い合わせが可能になっている。このシンポジウムは、公園・レクリエーション教育者学会（Society of Park and Recreation Educators）が中心となっており、北米におけるレジャー・レクリエーション研究者の多くが集う場でもある。会議は、10月から11月にかけて開催される。ちなみに今年は、ソールトレイク市で、10月29日から11月2日まで開催することになっている。

★Hedley S. Dimock編「Administration of the Modern Camp」Association Press・1948

本書は、組織キャンプの全貌を知る上で、たいへん役に立つ。アウトドア志向が高まる中で、日本においてもキャンプや野外活動の機会が多くなり、その形態も多様化してきた。また、レジャー・レクリエーション活動の一分野としても定着してきた。

組織キャンプが、レジャー・レクリエーション分野

に入るかどうかの論議はさておいて、野外レクリエーション活動に興味があれば、基礎知識をつけるためには必読したい文献である。なお本書は、アメリカにおけるキャンプ関係図書のベスト・テンの中にランクされている。

野外教育関係では、江橋慎四郎編著「野外教育の理論と実際」杏林書院・1987やレクリエーション活動になり得る活動分類については、筆者編著「レクリエーション概論」不味堂出版・1980なども参考になる。

## V むすびにかえて

以上レジャー・レクリエーション活動・行動研究分野の概要に触れ、基本的な図書の紹介をしてきたが、終りに当たって、研究全般の所感を、二つだけ述べていただきたい。

1) 実践家が研究者（区別すべきものでもないと思うが）に、絶えず求めていることは、研究に対して、いわゆる“So what?”ということである。研究結果を、レジャー・レクリエーションの実際場面に、どのように適用し、どう役立つのかを、研究に携わる者として更に強く意識し、相互理解を深めることが大切と思われる。

2) レジャー・レクリエーション研究分野も、今後ま

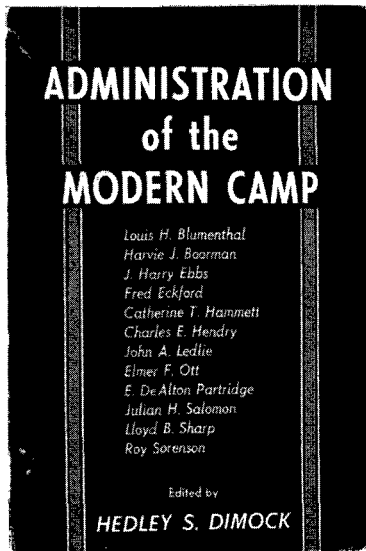


写真 5. Administration of the Modern Camp

すまず細分化していくものと思われる。そうなると、各分野の研究は進展するであろうが、レジャー・レクリエーション研究全体としては、社会的インパクトに欠けるきらいが懸念される。人間のからだのように、各分野の自律性を保ちながら、協調的な相互関係のあるシステムとして、レジャー・レクリエーション研究が発展することを期待したい。

### 引用および紹介文献

- 1) G.D.バトラー著三隅達郎訳：レクリエーション総説，ベースボール・マガジン社，1960
- 2) Thomas L. Burton ed., Recreation Research and Planning, George Allen & Unwin, 1970
- 3) Thomas L. Burton ed., Experiments in Recreation Research, George Allen & Unwin, 1971
- 4) Hedley S. Dimock ed., Administration of the Modern Camp, Association Press, 1948
- 5) 江橋慎四郎編著：野外教育の理論と実際，杏林書院，1987
- 6) S. Melamed & E. I. Meir, The Benefits of Personality-Leisure Congruence: Evidence and Implications, Journal of Leisure Research. Vol. 27, (1), 25-40, 1995
- 7) 西野仁・知念嘉史・吉川麻理子：日本人のレジャーの捉え方に関する研究の試み—その1 研究の背景と目的・方法について—，レジャー・レクリエーション研究34, 34-35, 1996
- 8) NRPA. Abstracts from the Symposium on Leisure Research, NRPA, 毎年1回発刊
- 9) 日本レクリエーション学会編：レクリエーション学の方法，ぎょうせい，1987
- 10) 日本レクリエーション協会編：レクリエーションの科学，不昧堂出版，1975
- 11) 佐橋由美：女子大学生の日常生活場面におけるレジャー経験の検討—経験抽出法（ESM）を用いて—，レジャー・レクリエーション研究34, 40-43, 1996
- 12) Sepo E. Iso-Ahola & Chun J. Park, Leisure-related Social Support and Self-Determination as Buffers of Stress-Illness Relationship, Journal of Leisure Research, 28 (3), 169-187, 1996
- 13) Sepo E. Iso-Ahola, The Social Psychology of Leisure and Recreation, Wm. C. Brown Co., 1980
- 14) 高橋和敏編著：レクリエーション概論，不昧堂出版，1980